

(始良郡隼人町大字内山田字日秀坂他)

### 位置と環境

遺跡は鹿児島神宮の所在する標高約30mの台地の西端の斜面部に立地する。後背には、標高25mのシラス台地の山が聳える。神宮の建物を挟んで境内の東には、以前から知られた縄文時代前期といわれる神宮境内貝塚がある。貝塚のある場所は、海岸線から3km内陸部に位置し、東側1kmを天降川が流れている。

### 調査の経緯

宗教法人鹿児島神宮による駐車場進入路建設に伴って、平成7年1月に発見された。その後、平成10年8月に貝層が崩落したため、町教育委員会による貝層断面記録調査が平成10年8月17～28日に実施された。高さ5.5m、長さ8mにわたって断面測量がなされている。その際、崩落土や崖面から遺物が収集されている。

### 遺構と遺物

基盤層の国分層群と呼ばれる砂層とシルト層の互層の上に、砂礫層があり、その上部に貝層・遺物包含層があった。標高27m付近に貝層がみられ、縄文時代の5か所の貝ブロック（第1～5号ブロック）と1か所の歴史時代の第6号ブロックに分けられる。

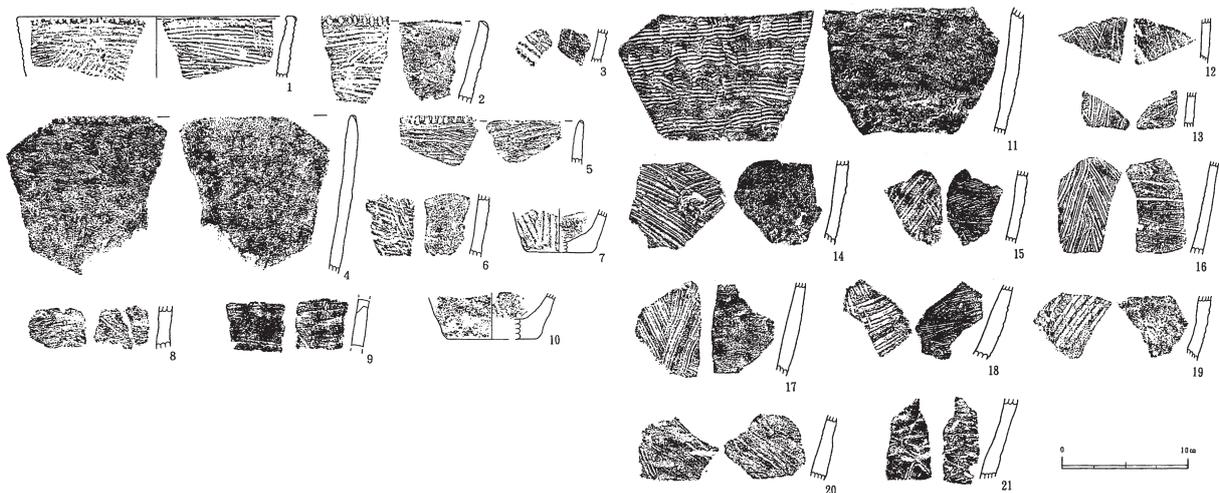
最も残存の良好なものは第3～5号ブロックで、検出した部分がブロックの中心と思われる。



第1図 宮坂貝塚の位置

層序を観察した結果、第3層がアカホヤ層の可能性があり、第1～5号貝ブロックはそれよりも下層に位置している。ブロックの大きさは、径1m、厚さ約40cmを測る。貝・土器のほか、骨・歯・鹿角製品・黒曜石製の石鏃などが含まれる。貝は径10cm前後のハマグリを主体とし、少量のマガキ、ハイガイ、ヒメアカガイ、アカニシなどがみられた。

貝のほかには、縄文土器、土師器、瓦など約300点が出土している。縄文土器は貝殻による条痕、竹管状工具等による条線をもつものなどで、南種子町横峯C遺跡1類・3類土器に類似するものなどがみられた。また、綾杉状に施文され、従来轟A式土器といわれていたものも出土している。ほかにはハマグリ製の貝刃と有孔貝製品がそれぞれ1点見つかっている。



第2図 宮坂貝塚出土土器

## 特徴

ハマグリが7割を占める貝塚であるが、貝類の中で稀有なものとしては、ヒメアカガイの存在が指摘されている。関東地方にはみられない貝種という。また、ほかの貝種に比し、ハマグリはチョーク化が進んでおり、その原因として「焼きハマ」の可能性が考えられている。いずれにしても、ほとんどは内湾・砂浜の潮間帯に棲息する貝種であった。出土した土器は、縄文時代早期の中～後葉の論議を呼んでいる土器群であり、また、アカホヤ層の下部からの検出ということから、県内でも古い段階の貝塚である。九州島内でみても貴重なものとなった。<sup>14</sup>C年

代測定結果は、約6,800年前後を示している。

これら貝塚を形成した人たちの居住部分については、神宮の境内にあると思われるが、未調査である。

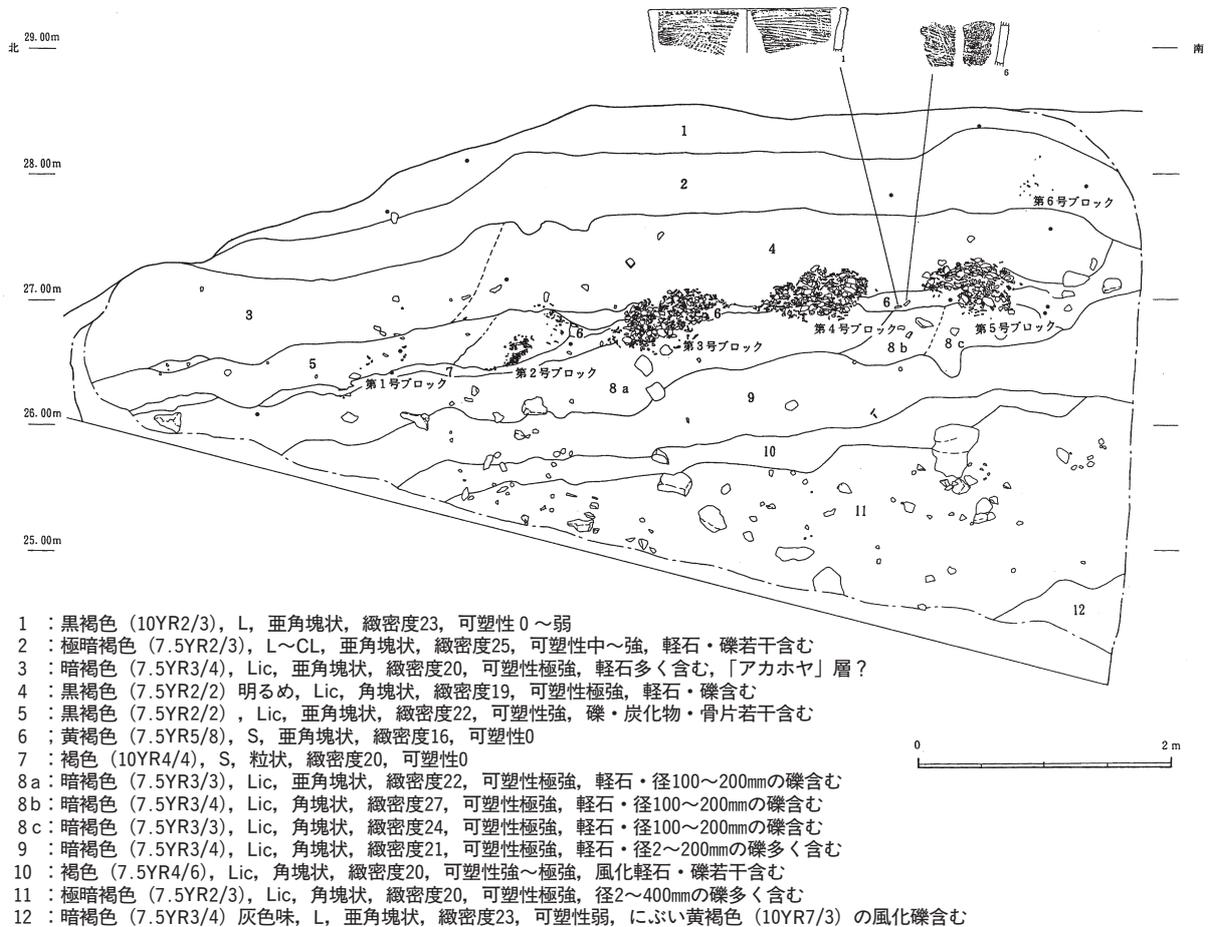
## 資料の所在

1999年に町の指定史跡となり、現地はそのまま保存されており、貝層の見学が可能である。出土遺物は、隼人町教育委員会に保管されている。

## 参考文献

隼人町教育委員会2000「宮坂貝塚」『年報』第9号  
隼人町立歴史民俗資料館

(重久淳一)



第3図 宮坂貝塚断面図